

1. 獨協医科大学における PBL テュートリアル教育の 学生評価法と今後の課題

テュートリアル教育委員会 吉原重美、松田隆子、内田幸介、川又 均、柳田 修、今村武佳、本田幹彦、武藤孝司、徳留省悟、金子 昇

【目的】本学において第1、2、3学年を対象に初めてテュートリアル教育が実施された。テュートリアル教育において評価法の確立は極めて重要である。今回行われたテュートリアル学習評価法の問題点について検討を加えた。

【方法】各学年を17グループに分け、1、2学年は統一課題、3学年は臨床問題解決型課題で行った。評価はテューターによる評価、レポート評価(各々4段階評価)、出席点からなり、テューター評価は、問題抽出能力、自己学習能力、説明能力、グループへの貢献度、多面性、統合性の6項目で評価した。又、この6項目で自己評価させた。

【結果】各学年の6項目評価点、レポート点、総合点の平均点は学年間で差はなく、6項目評価点では、各学年で説明能力と多面性がやや低かった。テューター間で平均1段階以上の評価差を示したグループ数は1、2、3学年各17グループで各々2、3、2グループであった。各学年で成績の低い学生は自己評価をテューターより高く評価する傾向にあった。

【考察】教養、基礎、臨床系とテューターの専門性が異なっても学生評価に差異はなく、テューター間の評価のばらつきに対しては、今後評価の標準化を含めた検討が必要と考えられた。

2. 期末試験の成績と出席 率・卒業試験などの相関

生理学(液性統御)

山岡 貞夫

14年度卒業生と在學生(2-6学年)の全教科の科目別成績(平成15年度2学期まで)と10月末までの欠席コマ数、2学期までの再試験科目数の相関行列を作成した。この相関行列より、低学年の再試験数でも、全学年の再試験科目数と非常に高い正の相関があり、ほとんどの主要科目とは非常に高い負の相関のあること。欠席コマ数は教養科目や基礎科目と高い負の相関(特に生物や基礎機能系科目)が見られる。14年度卒業生の5年学年末試験・BSL評価は臨床科目との相関は認められなかったが、15年度卒業予定者の学年末試験は3年の基礎・臨床科目、4年の臨床科目・BSL評価6年の1次卒試の一部と高い相関が見られ試験評価の適切度の向上が認められる。また5年学年末試験やBSL評価が1年前の評価と比して格段に向上しているため、非常に重要な科目であるケーススタディーやCCSが良い相関性に向上するような評価法の検討が必要である。